

はた はた
畑の端 木々の緑に 小雨の音
こさめ ね
もり めぐみ
杜の恵は 若栗 茗荷
わかぐり みょうが

令和五年八月十二日

大中臣正比呂



朝起きると、栗が落ちている。お隣りの畑には茗荷が茂る。

連日の風雨の為だろうか。時折の小雨は未だ続き、台風一過の恵を得た。

野生の茗荷は草に埋もれて、鹿が見い出せなかったのか、荒されていない。

ポウルいっぱいになるかな、と思いつつ控えめに採ってきた。

味噌汁に入れると美味しい。